

---

# 鏡の中で

唯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鏡の中で

### 【Nコード】

N7648B

### 【作者名】

唯

### 【あらすじ】

とある散髪屋に入った1人の青年。中には若い女店員が1人だけ。「後ろの辺切ってください」「分かりましたー」――。

「いらっしゃいませ」

元気な女店員の声が店内に響く。今は彼女1人だけのようだ。  
声と同時に入ってきたのは少し髪の長い青年、倉野良和だ。  
くらの よしかず

「カットとシャンプーお願いします」

「あ、はい。じゃあそちらに座って待っててくださいねー」

店員は横にあるソファを指した。言われた通り、良和は隣に置いてある黒いソファに腰を下ろす。ソファの柔らかさは、後ろに吸い込まれそうなくらいだった。

しばらくしてから先客が出ていき、店員が良和の方に近付いて行った。

「お待たせしました。あちらにどうぞ」

「はい」

散髪屋の中は主に黒色が使われている。ソファも散髪用の椅子も、そして床までも黒だ。

「どんな感じで？」

「後ろの辺切ってください」

「分かりましたー」

店員がそう言った時、少しだけ目の前がグラついた。  
変に思ったものの、店内は先程までと何も変わらない。

店員は良和の髪を洗った後、銀色に光るハサミを出し、髪を切り始めた。

（若いのに上手いな）

良和は鏡に映った店員の顔を見ながら思った。  
しかし、不意にチクリと痛みが走る。

「!？」

「あ、すみません。痛かったですか？」

「いや……」

当たり前だろ、と思いながらも、良和はまた前を向く。だがしばらくしてからまた痛みが走った。

さっきから首の後ろ辺りに痛みが走る。

「あの……」

「はい？」

「痛いんですけど……ハサミ当たってませんか……？」

良和は鏡越しの店員を少しだけ睨んだ。向こうも鏡越しに良和を見ってくる。

その顔は、一瞬だけ笑ったように見えた。そしてその笑みの後、またしても目の前が揺れた。

「いえ……？ 当たってませんよ」

店員はそう言ったものの、その後も何度か痛みが走った。

「……いい加減にしろよ！」

とうとう良和は立ち上がった。何度も痛みが走るの、我慢の限界だったのだ。それでいて店員は知らないふりをするばかりなので、更に怒れてくるようだ。

「え？ あの……」

「さっきから何度も何度も当てやがって。さすがにもう白ばっくれねえよな？」

「いえ、何の事ですか……？」

「ふざけんじゃねえよ！ ハサミだよ、ハサミ！」

鏡に映った良和の首の後ろには赤い血が滲み出てきていた。

しかし店員は未だに分からない顔をしている。

首の後ろを流れる血を拭くと、良和はそれを見つめた。店員への怒りが込み上げてくるが、ふと不思議な箇所を思い出した。

1度目の痛みが走った時、この店員は確かに「痛かったですか？」と聞いてきた。

故意にやったのだろうか？

だが今の店員は全く分からない顔をしている。

「……どう言う事だ……？」

良和は口の中で呟いた。

それにあの鏡で見た笑いも気になる。

鏡越しに、店員にも良和の血が見えているはずだ。それなのにタオルやティッシュを用意しないのは何故だろうか。

「ティッシュ」

「……え？」

「早くティッシュをくれ」

「………あ、はい」

良和は店員の持ってきたティッシュを取り、首の後ろを流れる血と手に付いた血を拭いた。真っ白なティッシュに付いた真っ赤な血も、店員には分からないようだ。

しかし、彼女が演技をしているようにも見えない。

真っ黒な床と同化している自分の髪を見下ろし、良和は眉を顰<sup>ひそ</sup>めた。

（一体どうなってるんだ……）

床とティッシュとを交互に見ているうちに、また目の前が揺れた。床が回転しているように見える。黒い床に吸い込まれそうだった。

無意識のうちに、良和はまた散髪用の椅子に腰掛けていた。

「……大丈夫、ですか……？」

良和は鏡を見た。店員が心配そうな顔をしている。今度はきつく睨<sup>にら</sup>んだ。

鏡の中の店員はさっきと同じ笑みを見せた。不敵に、そして不気味に笑っている。

だが鏡から目をそらし、少し顔を上げて店員を見ると、心配そうな顔で見ているだけだ。口角は上がっていないし、目も細めるところが見開いている。

「………ここは……なんなんだ……？」

「え？」

「鏡の中のアンタは笑ってる……」

「鏡……？」

店員は鏡を見た。不思議そうな顔の彼女が映っているだけだ。

「それにこの血……。これを見てなんとも思わないのか……!？」

良和は、握っていた手の力を緩め、震えながらティッシュを店員の前に突き出した。

「血……って？」

「あるだろ、ここに！」

懸命に伝えようとするが、良和の指した場所を見ても店員は首を傾げるばかりだ。

「……………もういい」

そう言うと、良和は体に被さっていたクロスを脱いで丸め、店員に返した。

「あの……」

「帰る。いくらだ」

「シャンプー代だけで1000円になります……けど、あの……」

店員の言葉に耳も貸さず、良和はカウンターの上に1000円を叩きつけると、ドアを押し開けて出ていった。

店内に残された店員は、ボーッと出入り口を眺めていたが、しばらくするとノロノロと歩き出し、床の上に散乱している髪をほうきで掃き始めた。

良和の言っていた事の意味は全く分からないままだ。

(鏡……)

ふと、彼の言葉を思い出し、鏡を見た。

どこも何も変わらないただの鏡だ。店員の顔も変わらない。首を傾げた後、また下を向いて床を掃き始めた。

鏡の中で、彼女の後ろに置いてある銀色のハサミには、しっかり

と赤い血が付いていた。

## （後書き）

読む人によって受け取り方の違う小説を書きたいと思ってました。作者が最後を決めるのではなく、読者様方がそれぞれ違う最後を決められる。

この小説が、そんな作品になっていれば嬉しいです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7648b/>

---

鏡の中で

2010年10月8日15時14分発行